

もしも黒がヘタレじゃなかつたら。 +  $\alpha$

一般的な人間

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原作の星があまりにも救いがなかつたので救いのあるルートを開拓してみた。

あまぜんぜん内容できてないんだけどね!!

とりあえず土台作つて少しずつでも進めていきたいなあ。

D様なら何とかなるだろ!!

と思う方もいると思います、でも自分はこう考えました。

原作と違う流れになつたらそれはそれで面白そうとD様も思うのでは?と。

目 次

もしも黒がヘタレじやなかつたら。  
+  $\alpha$

黒の記憶

4 1

もしも黒がヘタレじゃなかつたら。+ $\alpha$

「素晴らしい博愛精神です」

戻ってきたギュリエを、Dの平坦な声が出迎えた。

その口調では本当に素晴らしいと思っているのかどうか、本心が伺えない。

「ええ」

ギュリエは同意しながらも、今回もサリエルの言う通りにはできないと決意していた。

全ての元凶。ポティマス・ハイフェナス、奴だけは殺さなければならぬ。

ポティマスは殺す、転生すらできぬよう徹底的に。

「その博愛精神をみなr」

突然、Dの声にノイズが走った。そして、

「?おかしいですね、私の偽装工作は完璧なはずですが?」

「今は”彼”が偶然地獄に寄つてくれたので協力を申し込みました」

いつの間にかメイドが立っていた。私の隣に。

そしてDが頭だけになつていた。

「なっ!!」

(いつ、何時の間に?!それに気づいてから体の震えが止まらない!下位とはいえ仮にも私は真なる龍だぞ!)

「ああ”彼”がいたのですか。なら仕方ありませんね。ところでなぜ

そんなに怒つているのです?」

“彼”的おかげであなたが隠していた問題まで発覚したからです。おかげでこちらは大忙しです

「いーやーでーすー働きたくありません。それに隠していた問題の修正なんて、私が直接解決しないといけないものばかりですよ。せつかくここから面白くなりそうだというのに、これではリアルタイムで見れないじゃないですか」

「黙りなさい。こちらはあなたのせいで火の車なんです。さつさと戻

りなさい」

「えーーー、では少し待ってください。予想としては200年ほど面白いものが見れそうなんです」

「・・・」

「沈黙はこうt」

瞬間、Dの姿が焼き消えた。

それから少しして、同時に私の抗いようのない体の震えも止まつた。

気づけば私の周りには誰もいなかつた。

「・・・」

「戻るか」

先ほどのメイドによる恐怖で頭が冷えた。  
まず私がするべきことを確認しなくては。

サリエルの願いの1つ、人々を争わないよう、殺しあわないように導く。それを実現させることは無理だ・・・既にその約束破つている。戦争の最後のひと押しをしたのは私であり、今更止めることなどできないから。

そのことをどうしようもなかつた、とは言えない。

「サリエルはこんな未来を望んでない。それはわかっていた」

Dから提示した方法を確認したその時からわかっていたはずだ。大勢が何度も死ぬと。

私は間違えたかもしれない。もつといい方法があつたかもしれない。

自分が正しかつたのか正しくなかつたのかの自信が持てていない。それでも、

「あいつらを守ることはできるはず・・・いや、やつて見せる」

まずはどこにいるのかを把握しなくては。一力所に固まつていればいいのだが。

「いや、あいつらが全員一つの場所でおとなしくするのか?」

ちよつとしたグループができると思うが、全員がサリエルのために個別に動くということを確信する。

彼ら彼女らは仲間を思うあまり無茶をしがちだ。

最優先はサリエルの願い、孤児院の子供たちの補助。なにか良い手を、私がいつまでも張り付かなくていいような手段を考えなくては。それと同時に、

「ポテイマス、どこに隠れていようが必ず見つけ出して殺してやる」

# 黒の記憶

## 帰還初日

決意して早々、私は壁にぶつかっていた。そう、孤児院の子供たちをどう補助するかである。

私があの空間にいた時間は少なかつたはずなのだが、時間の流れが違つたのか戻つた時には既に人同士の殺し合いが発生していた。俗にいう世紀末だな。

私が焦つて孤児院のあつた場所にいけば暴徒にでも荒らされたのか、壊れた孤児院が残骸として残つていた。

どうやら私が張つた結界はサリエルが壊したらしい。

どうにか早期に見つけることはできたがここでどうしようもない問題が多々あつた。

その中でも大きなものが三つ、

一つ、子供達が衰弱し始めている

二つ、寿命の少ない子がいる

最後、私が嫌われていた

……別に私が何かしたわけではないんだ。何もしなかつただけであつて。

## 帰還から三日後

幸い手の施しようがない問題はなかつた、最後以外。

……とおりあえず解決できる問題から解決しよう。きっと時間が解決してくれる…………はづだ……

と、とりあえずは解決できる問題からだ。

まず1つ目の問題。子供達の衰弱だが、主に食糧不足と心身共に休める場所が無いことが原因だった。今の世界で満足な生活のできる者など存在していないだろうからな。ヤツ以外。

あいつのことは、ひとまず置いておこう。場所さえ掴めればいつも殺すことはできる。それに奴が隠れてそうな場所の目星はついた。優先すべきは、孤児院の子供たちだ。

まず、休める場所は隨時私が結界を作り解決した。

一部の子供たち、は自分たちだけが安全な場所にいる、ということを良しとしなかつたがな。

……私は、サリエルを捧げることを良しとした人を、守ろうとするほどできた神ではなかつた。それだけだ。

このことに子供たちは、何も言わなかつた。

そして食料だが私が探して届けるようにした。

世紀末になつたとはいえたま缶詰等の防災食品、保存食がある

……ポティマスの隠れ家にな。

奴は自身のクローンを大量に用意し独自のコミュニティーを作つていた。

そのクローン共の隠れ家に食料がのこつていれば、あわよくば奴に繋がる情報でも手に入れればいいのだが………と思い、目星を付けたところをしらみつぶしに探つたのだ。

まさか両方手に入るとは思わなかつたがな。

システムが稼働したからか、他の理由があるのかは定かでは無いが、奴のクローンは活動を停止していた。おそらくだがDのシステムの影響でだろう。

食料補給の痕跡がまだ残つていたため、奴にとつて想定外のこと、または不都合なことが起きたと予想をしている。

あの完璧主義者がこれほどの痕跡に無駄を残しているのだ、よっぽどのことが起きたのだろう。

偶然だが、奴のおかげという事実が非常に瘤に障る。だが貴重な食料だ。もちろん根こそぎ持つて行つた。

一つの隠れ家に十数人分の食料が2ヶ月分ほどあつたため、子供達の食料も当分持つだろう。

そして奴に繋がる情報だが、つい最近まで食料補給を行つていた形跡が残つていた。ご丁寧に、どこから、どう搬送したかも記録されている。ヤツの完璧主義者つぶりがよくわかる。

おそらくだがシステム稼働初期はクローン達も問題無く動いていたのだろう。クローンとはいえ人だ。稼働するのにエネルギー、食料がいる。

サリエルのおかげで星は、環境は回復した。しかしそれだけだ。秩序は完全に崩壊している。この環境で安定した食料生産など無理だ。そう、ヤツがいるであろう安全な場所以外は。

自分は安全な場所から食料を送り、後はクローランたちに情報を集めさせる。暫くは問題なかつたのだろう、しかし、何らかの不具合が起きクローランの稼働停止した。

急なことだつたのだろう。全ての隠れ家が完全に放置されていたのだから。

結果として、食料も手に入り、ヤツの居場所大方もわかつた。クローランの隠れ家を全て潰した後、奴を殺す。